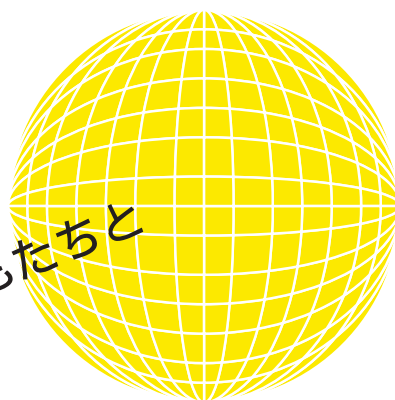
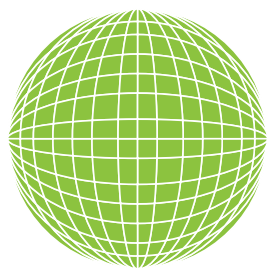


10 2004
October

<http://elm.m78.com/>

にれのき

“にれのき”は、エルムアカデミーが、
父母・OB・サポーターに向けて発信する情報誌です。



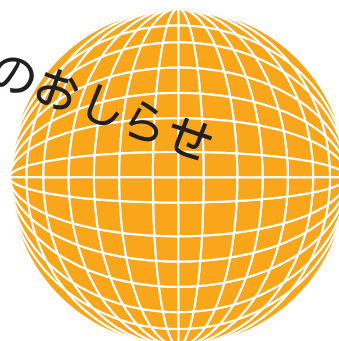
特別な教育的ニーズをもつ子どもたちと
エルムの新しい挑戦

キャンプ成立前史
～キャンプをつくりだしてきた子どもたち



他者との関わりのなかで変わる子どもたち

ケニア・スタディーツアーのおしらせ



特別な教育的ニーズをもつ子どもたちとエルムの新しい挑戦



「オレは昔は明るかったけど、今は闇。
心が闇になったり、犬になったりする。」

特別な教育的ニ ーズをもつ子ど もたち

「分からないことを知られると、何度もやらされるからイヤだ……。」

エルムでの最初の授業でA君（小5）は言いました。彼は、文字を「読むこと」や「書くこと」に大きな困難があり、学校の授業にはほとんどついていけません。しかし、まわりからは、

「がんばりが足りない」「やればできる」といったことを言われ続けていました。そのことは本人に大きなストレスとなり、家庭でもそのストレスが始めてきた頃、エルムと出会いました。

はじめは「塾」というイメージから、苦手の勉強を無理やりやらされるのではないかという不安や緊張から、A君は自分の殻に閉じこもり、私たちに教員に対しても非常に攻撃的で非協力的でした。そこで毎回の授業

のはじめに、トランプやオセロなどゲームをしたり、彼の大好きな電車の話をしたりと、A君の殻をやぶり話し合える関係づくりからスタートさせました。すると回を重ねていくうちに、

「教科書の字が小さくて読めない」「わり算からわからなくなつた」など、これまで誰にも言うことがなかった、学校のこと、勉強のことについて、ポツリポツリと話しをしてくれるようになりました。

その後、専門機関での相談や診断を経て、特別な教育的ニーズがあると判断され、学校や保護者とも連携をとり、彼の特性にあった学習を少しずつスタートさせています。「読み・書き」についての困難と付き合いながら、豊かに自分を表現し、自分の世界を広げていけるように、彼にあった個別の授業を進めています。

彼のように、本人のがんばりや努力とは別に問題の本質がある子どもたちの多くは、適切な

対応がされずに、「勉強が辛い」「学校が辛い」「しいては」「人間が辛い」になってしまう場合が多々あります。こうした特別な教育的ニーズをもつ子どもたちに対して、私たちエルムの新しい挑戦がはじまっています。

仲間のなかで育てる

「オレは昔は明るかったけど、今は闇。心が闇になったり、犬になったりする。」

これは算数に困難を抱えているB君(小6)の言葉です。

学校で苦手な算数を無理やりやらせようとする教師とぶつかり、勉強することそのものを拒否するようになってしまいました。エルムでの最初の授業では、算数のプリントをグシャグシャに丸め口に入れ、こちらを強く

にらみつけながら、「オレに勉強をさせることは絶対にできないぞ!」と言いました。

特別な教育的ニーズを抱えている子どもたちは、「できること」「よりも」「できないこと」「に目が向きがちです。」「どうせできない」「やってもムダ」とあきらめ、自信を失っている子がほとんどです。そういう中で、適切な方法を示さずに、勉強を強要するのは、かえって逆効果となり、苦しみの傷口を大きくすることになると思います。エルムでは、その子の到達とニーズにあわせて、自信と信頼を取り戻すような授業をつくる努力をしています。

しかし、一対一の授業だけでは、どうしても限界があります。先のB君を大きく変えたのは、エルムの仲間との出会いでした。B君をはじめとして、特別な教育的ニーズをもつ子どもたち

は、生活習慣や社会性についても多くの課題を抱えており、友だち関係でもトラブルを起こしがちです。

こうした現状から、エルムでは個別授業とは別に、同世代の仲間たちと一緒に取り組む、特別カリキュラム(特カリ)やキャンプなどに積極的に参加させ、仲間との関係の中で成長していくことを大切にしています。

勉強ではなかなか力を発揮できないB君も、特カリやキャンプではたくさん活躍の場を持つことができました。安心して自分を出せる空間と、楽しい仲間を持つことは、どんなことでもチャレンジできる土台となります。

さまざまな成功体験を積み重ねていくなかで、苦手なことも「やってみようかな」と思うようになり、B君の場合は、ほとんど参加を拒否していた算数の授業にも、少しずつですが取り組むようになってきました。

夏のキャンプにも、A君やB君をはじめとした、特別な教育的ニーズをもつ子どもたちが参加しました。一人ひとりの特性に配慮しながら、みんなで一つの企画を成功させるよるこびや達成感が、かれらを大きく励

ましました。キャンプに参加した全員が「楽しかった」「また行きたい」という感想を寄せ、仲間とエルムへの信頼関係を大いに深めることができました。

さまざまな成功体験を積み重ね、仲間の中で育ちあうことは、失っていた自信を回復させ、彼らの将来にも関わる大切な力を醸成してくれると思います。今後も充実したプログラムやイベントを企画していきたいと思っています。

課題と今後の展望

マスコミなどの影響もあり、

LD(学習障害)やADHD(注意欠陥多動性障害)、アスペルガー症(高機能自閉症)など、さまざまなタイプの軽度発達障害についての関心は、親たちを中心に大きく高まってきました。

しかし、実際のところ、対応している学校現場などの理解、また行政の対応などは必ずしも進んでいるとは言えない状況です。

一方で我が子がそうとは知らずに、「他の子はできているのに、どうしてうちの子はできないんだらう?」「何度も注意している

のに、どうして同じトラブルをくり返すのだらう?」といった悩みを抱えている家庭は想像以上に多いようです。そして、そうした子どもたちに、宿題が終わるまで食事を与えなかったり、寝かせなかったり……、親が有効な手だてをせず、子どもも親もストレスが溜まってしまおうが現実のようです。

「どの子にも豊かな学力と健やかな成長を」というのは、すべての人の願いです。とりわけ特別な教育的ニーズがある子どもたちに対しては、エルムとしても重点課題として、先に述べたような実践をスタートさせました。

専門的にも発展途上にあるこの分野について、まだまだ多くの課題が残されています。しかし、そのような子どもたちの発達を保障するために、エルムの役割は重要です。家庭と子どもたちの声にしっかりと耳を傾け、学校や専門機関と連携・協力しながら、この分野での実践を深めていきたいと思っています。

中塚史行(なかつか ふみゆき)



授業で使用している国語(上)算数(下)の教具の一部。大きな文字のカルタや、パズルなどを使い、丁寧に「わかる」体験を積み上げていきます。授業は原則としてマンツーマン形式で、ひとりひとりのニーズに合わせて授業を展開しています。

キャンプ成立前史



キャンプをつくりだしてきた子どもたち
 ～4月からの8月までの特カリ実践をふり返って～

「エルムの特カリって…」

私たちは、子どもたちの「知りたい」「やってみたい」という要求を学習へと組み立てていく『特別カリキュラム』という授業を二十年間続けています。私たちがここで大切にしているのは、『やらされ体験ではなく、やりたい体験をすること』です。

最近、さまざまな体験型の総合学習が取り組まれてきていますが、いくら大人が「意味のある体験」を積ませる取り組みをおこなっても、子どもたちが、それを自分にとって本当に「やりがいがある」と実感できなければ、それは「やらされ体験」になっ
 てしまい、子どもたちの中には、「意味のある体験」として残らないのではないのでしょうか。

だから、私たちは、子どもたちが「本

当に自分がやりたいこと」「自分にとって意味あること」をじっくり考えることから出発します。小学生は、「自分がやりたい」と思えることには本当に夢中になるものですし、それを多少苦労してでも誰かに伝えずにはいられなくなるものです。

仲間自分の考えを表明し、仲間の意見にも耳を傾けながら、お互いのよいところを取り入れ、夢を膨らましていくような話し合い」を重ねながら、一つのものをつくりあげていく……。時間はかかるけれど、このような経験の積み重ねが、自分と他者を力強くつないでいき、子どもたちの豊かに生きる力を育てていく、何よりの近道ではないかと考えています。

二〇〇四年度 特カリスタート

ならず、大きな成果を残すことが
 できました。

私が初めて小学部を受け持つ

今年の夏キャンプの取り組み

た4月…新しい生活に胸躍ら

は、雨という悪条件にもかかわらず

せる期待以上に、学校での人間

関係を傷つき、ストレスや不安
 を抱え、その気持ちを私たちが教

員やクラスの仲間へぶつける子

どもたちの姿がありました。「死

ね」「うざい」「きもい」といっ



今年の象徴的なシーン。「キャンプファイヤーもみんなで盛り上げよう」と、参加者全員が時間をかけて出しものの準備練習をしました。

何よりも大切にしたいのは、「一人ひとりの声（特に言葉にならない声）をよく聴き取り、一人ひとり大切にする」という

この取り組みを続ける中で、子どもたちは、自分の「めあて」や「出番」が明確になればなるほど、ありのままの思いを出すことの心地よさを覚えていきます。

そこには、「メチャクチャ楽しいキャンプを、この仲間たちとつくりたい」という要求をもった、頼もしい集団と一人ひとりの最高の笑顔がありました。
坂口大（さかぐち だい）

自分のことを ほつと見 てほしい という思い

そして、私たちが

強くなりました。この取り組みを続ける中で、子どもたちは、自分の「めあて」や「出番」が明確になればなるほど、ありのままの思いを出すことの心地よさを覚えていきます。

そこには、「メチャクチャ楽しいキャンプを、この仲間たちとつくりたい」という要求をもった、頼もしい集団と一人ひとりの最高の笑顔がありました。

た言葉の数々が、エルムでも例外なく飛び交っていました……。「ここ数年、「うざい」「きもい」「はあ？」といった感覚語が、小学生の間でも当たり前に使われるようになってきました。特に、「うざい」「きもい」などの言葉は、その後、「……だから近寄るな（関わるな）」というニュアンスを含んでいるようで、他人との距離感や関係の築き方がうまくつかめず、集団の中でなかなか自分を出すことができないでいる……、そんな今の子どもたちの状況を反映しているように感じます。

や集団をどう認識させていくか……、これが小学部に課せられた課題と考えました。こうした状況をふまえ、私たちは、『集団に対する肯定観』を育て、『集団の中で自己表現できる力』をつかませていくということをし、今年度の特別カリキュラムの大きな目標としました。

「こころと身体を ひろく

小学生の「話し合い」を成立させる前提はいろいろありますが、子どものこころと身体が開かれることは重要です。そうではないと、素直な思いは出てこず、「話し合い」も成立しません。小学生にとっては、心を開放させる

るうえで、子ども同士の気持ちを交流させるうえで、ねらわれた「勢い」や「楽しい」という感覚のなかで、気持ちを開放していくことが非常に重要であると考え、徹底的にこだわりました。どんなに素晴らしい意義や目的を語っても、それだけでは小学生は動きません。子どもたちに生き生きとしたパワーがみなぎる瞬間というのは、そこに参加することが「楽しそうだな」「楽しいな」と感じる時です。ですから、心を開放させる「ゲーム」から「話し合い」に至るまで、さまざまな場面において、子どもたちが「楽しい」と感じられる工夫をちりばめる工夫をしていきました。

次に、「こころと身体をひろく」という思いを胸に秘め、自分の輝ける瞬間を心から待っています。そんな思いに対して、子どもたちが主役となり、自分を表現し仲間や教員から認められる「出番」を積極的につくること、そして、そこで生まれた、心あたたまるドラマを、みんなが確認し積み上げていくこと……毎回の特力りの授業の中に、そういう場面をどれだけ意識的につくっていかれるかどうか、この点を強くこだわりました。



「最後のキャンプだから思い出に残ることをしたい」と6年生から提案。エルムから奥多摩まで、13時間かかって走破しました。

他者との関わりの中かで変わる子どもたち



毎年、夏の合宿では子どもたちの成長を目の当たりにして、エルムの教育力のすごみを感じています。特に今年は、中三が準備段階から、中一・二年生を引っ張り、自分たちで団（チーム）をまとめあげて、すばらしい合宿を作ってきました。

その中で、私が注目したのは3AのHです。合宿準備のダンス練習の時は、ふざけていたHでしたが、担任から「今のままでは、昨年と同じ。合宿で自分を変えるという目標がある3年は自分達だけのことではなく、団全体をまとめて行動していく必要がある」と指摘されます。そして彼らのクラスは「スポーツ大会で団のメンバー全員でダンスを踊る」を目標にしました。Hは「絶対に踊らない」と宣言していた後輩のAの担当を自分から引き受け、その後は、彼につききりでダンスの指導をし

ました。練習になると毎日、毎日Aのとなりに寄り添うHの姿。必死でAに教えますが、なかなか上達しません。しかし、Aの心は少しずつ変わっていききました。

しかし、本番前日。Aは「本番は踊らない。うまく踊れないから、自分が踊ったらみんなに迷惑をかける」と話します。それを聞かされたHは「自分は踊れなくてもいいから、最後まで一緒にAとやる」と本番もそばに寄り添うことを決めました。本番当日。Aは、周りの子どもたちからの働きかけもあり、みんなと一緒にダンスを踊りました。もちろんHはAの隣に寄り添い踊っていました。

合宿最終日のHの口述です。

今、こうして気持ちよく思えるのも一番大きかった理由はAのおかげだ。Aという本当に変わ



ったと俺は思っている。一緒にダンスを頑張ってきて、本当に楽しかった。うれしいことも悲しかったこともあった。その流れがあったから自分の言いたいことややりたいこともできるようになった。つまりAがいてくれたから今の俺がある。それに

何事も全力でやってくれたみんながいたから今の俺がある。今年の合宿は本当に悔いがない。みんなありがとう、楽しかった。Hは他者と関わり、相手が変わる姿を見て、自分自身の成長を実感しました。「一部だけな

く、みんなが楽しめるものをつくる」「問題があれば何でも話し合う」など、エルムが子どもたちに伝え続けてきたメッセージが、Hの心の中に蓄積していったのです。今年は、彼も含めて小学部・中学部と六年間在籍した子どもたちが多くいます。まさに、エルムの文化や空気をめいっぱい吸ってきた子たちです。その彼らが作り出した今年の合宿は、エルムが二十年間積み上げ、培ってきた「エルムの教育」の集大成なのだと感じました。そして、それは必ず来年Aにも受け継がれていくものになるでしょう。

宮下哲

(みやした てつ)

「ここが見所! 中学部の夏合宿」

小林大祐 さん(慶應義塾大学教職課程センター)

エルムの合宿を見て一番印象に残ったのは、「団結」をつくるのに苦しんでいる中学生たちの姿でした。合宿でのスポーツ大会には個人競技はありません。それゆえ、どの競技でも、チームの団結こそが勝利の行方を左右することになります。

例えば、チームでダンスをつくるには、リズムに合わせて全員の気持ちをひとつにする必要があります。けれども、チームの中には、ダンスに積極的なメンバーもいれば、抵抗を感じるメンバーもいます。中学生たちは、互いの思いを本音でぶつけあいながら、「いったい、どういうダンスだったら、みんなが踊ることに意味が見出せるのだろうか」ということを、丁寧に話しあって、模索していきました。全体のダンスの練習の後、本当なら休みたい時に、引き続き、このような話しあいを持っていました。それは確かに体も頭も疲れることであつたに違いありません。それでも、スポーツ大会本番の直前まで、中学生たちはその苦勞から逃げ出すことをしませんでした。

話しあいの様子をかたわらで見ていて私は思いました。エルムの子ども達は、「わたしは自分らしくありたい。けれど、そのことでまわりの誰かのその人らしさを打ち消してしまうのでは意味がない」ということを考えているのではないか、この話しあいに参加する一人一人がこの意味を自分たちのものとして確認してきているのではないだろうか。

良質の苦勞をすることで人間にとっての大事な価値を実感するという面があります。自分や仲間のことを考え抜くということ合宿の中で体験したエルムの子どもたちは、それを実感しているのでしょうか。そして、その実感が楽しさにつながり、喜びにつながっているのでしょうか。

エルムの合宿はただ単に、「楽しい」といものではなく、苦勞して人間的な成長を手に入れた喜びが実感できるからこそ、子ども達にとってかけがえのない行事になっているのではないのでしょうか。



アフリカ・ケニア スタディーツアー

アフリカというと、報道などによる「内戦」「飢餓」「貧困」という暗いイメージ、もしくはテレビ番組の影響による「未開」「大自然」「奇妙な文化」といった異質なイメージが強いと思います。しかし、4年間 NGO スタッフとしてケニアで働いた経験では、いろいろな問題は抱えながらも、自分たちの社会や生活をより豊かにしていくために、力強く生きている人びとの姿がありました。地域に根ざし、地域とともに成長していく活動は、国や文化は違えども、私たちの生き方やエルムの教育実践と通じるものがあると思います。

今回企画したスタディーツアーでは、ケニアで活動する日本の NGO 『アフリカ地域開発市民の会 - CanDo (キャンドゥ)』() のプロジェクト現場を訪問し、地域開発や教育問題に関わる分野での交流や、さまざまな体験を行なっていきたいと思っています。そして、アフリカや国際協力についての興味や関心を高めるだけでなく、私たちの生活や、エルムの教育実践、地域での活動などを見つめなおすきっかけになればいいなと思っています。

ぜひ貴重な経験になると思いますので、奮ってご参加下さい。

() アフリカ地域開発市民の会 - CanDo (キャンドゥ) の活動については、同会HPを参照して下さい。

<http://www.cando.or.jp/>

日程 2005年3月15日～25日(11日間)

参加費 1人40万円(予定)

コーディネーター 中塚史行(エルムアカデミー職員・元 NGO “CanDo” スタッフ)

ミニ学習会& ツアー説明会を出発前に数回開催する予定です。

申し込み& 問い合わせ等は、エルムアカデミー 03-3784-5676 (担当: 中塚) まで。